

ROSEリポジトリいばらき（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	高来神社（神奈川県中郡大磯町）について
Author(s)	糟谷, 政和
Citation	茨城大学人文社会科学部紀要. 人文コミュニケーション学論集, 3: 71-76
Issue Date	2018-09
URL	http://hdl.handle.net/10109/13599
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館） 情報支援係
<http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html>

高来神社（神奈川県中郡大磯町）について

糟谷 政和

要旨

日韓（朝）文化交流史の可視的な教材として神奈川県中郡大磯町にある高来神社（1897年に高麗神社から改名）は埼玉県日高市の高麗神社とともに重要である。しかし神社の由来は社会の変化とともに変化することもあるので、教材として利用するにはかなりの注意を要するといえる。ここでは、高来神社の祭神と神社の祭礼である船祭（御船祭）について検討した。

1. はじめに

筆者は、本紀要第2号において古代における日韓（朝）文化交流の可視的な教材として現存する高麗神社（埼玉県日高市）と高来神社（神奈川県中郡大磯町）の現況について検討した^(注1)。

その結果、高麗神社は高麗（高句麗）との関係性を積極的に受け入れ、かつ716年（霊亀2）の高麗郡建郡以来続く高麗家が60代目宮司を務めて神社自ら高麗（高句麗）との関係性を積極的に発信し続けていることを確認した。一方、高来神社は確かに1897年の神社名を高麗神社から高来神社に変えて高麗（高句麗）との関係性を消そうとしているかに見えることを確認した。しかし高麗神社と高来神社はともに創建当時のままではなく、複雑な経過を経て現在のような姿になった点を明らかにする必要性について述べた。

そこで、本稿では、高来神社の由来に関する一つの史料を検討し、明治期における高来神社がその神社の由来についてどのような見解を持っていたのか、その一端を明らかにしたい。

2. 1895年（明治28）高麗神社「古社調査事項取調書」について

この「古社調査事項取調書」は、現在神奈川県立公文書館に所蔵されている^(注2)。

表紙は、「古社調査事項取調書 神奈川県相模国海老原郡大磯町大字高麗 高麗神社」となっていて、9丁の本文、建物図3枚、高麗神社鳥瞰図1枚からなる。

本文の項目は、「祭神」、「事由」（4つの事項）、「建物」、「宝物」、「古文書」であり、最後

に日付、差出人がある。日付は明治28年（1895）12月。差出人は、社司高麗邦桓他4名の氏子総代と大磯町長である。請取人は不明である。3枚の建物図は、1枚目に神饌所と高麗神社上ノ宮、2枚目には神楽殿と高麗神社下ノ宮、3枚目には神輿殿が描かれている。鳥瞰絵図には、高麗山山頂に上ノ宮と神饌所、麓に下ノ宮と神楽殿と神輿殿が描かれている。

3. 高麗神社の祭神と神社の由来 1895年（明治28）12月

本文の項目「祭神」と「事由」の第1種（事項1）の部分から、1895年（明治28）12月段階で、祭神は、神皇産霊尊と天津彦穗迺々伎命（瓊瓊杵尊）、配神として神功皇后と應神天皇の計4祭神であることがわかる。この祭神は現在の高来神社の祭神と同じである。その「事由」の第1種（事項1）の部分における高麗神社の由来に関する部分は、次のようである。なお引用文の読点は引用者が付したものである（以下同じ）。

本社ハ高来山^{高麗山ノ古名}頂ニシテ、往古神武帝中國ヲ戡定シ給ヒシ所ナリ、祭神ハ神皇産霊尊ト天津彦穗迺々伎命トニ坐シマセリ、（中略）後神功皇后ノ摂政二年^{壬午}六月大臣武内宿祢ノ奏聞ヲ聞食シ給ヒ三韓御征討ノ際、御船ヲ幽護シテ彼地ニ渡ラセラレ神威ヲ現表シテ皇軍ヲ冥助シ給ヒシ神靈トシテ神璽ヲ勸請セラレヌ、安閑天皇ノ二年^{甲子}ニ至リ東夷鎮撫ノ為メ神功皇后應神天皇ノ二柱ヲ合祀セラル、降テ大同年中役小角ナルモノ當山ニ登リ兩部垂迹ノ事ヲ唱ヘテ佛法ト混合シ、後又法相ノ沙門某社殿ヲ修補シ更ニ高来寺ノ堂宇ヲ開建シテ當社ヲ支配ス、其後小野文観僧正ノ中ニ係ル、或ハ真言宗或ハ天台宗ノ所司ニ帰シ、其他数多ノ變遷ヲ経テ、終ニ明治維新ニ至リ神佛分離ノ際、別當高麗寺^{高麗山頂上殿ノ下ノ寺}廃滅セシヨリ、復タ神職ノ奉祀スル所トナレリ、是レ其事由沿革ノ概畧ナリ

この記述の特徴は、高麗（高句麗）との関係性について「高麗」という単語を用いて述べないことである。さらに当然のように明治維新の神仏分離で廃寺となった高麗寺の千手観音の由来についても述べないことであるといえる。これは1897年段階での高麗神社の見解といえる。しかし特に高麗との関係性はそれ以前には説明されてきたのであるが、その史料として1591年（天正19）に定海が書いた「高麗寺一山建立記」がある。その由来部分は次のようである^(注3)。

当山者人王第一番神武天皇御宇開闢也、人王□□神功皇后ノ三韓御征罰アリ、其時彼国ヲヒテ神靈御出現皇后ノ御勝ノ御モトニ定驗テ神威を輝玉フ、□□神皇産霊尊ヲ武内宿祢大臣東夷者ヲ降伏ノタメニ、高麗国、神皇産霊尊韓館ノ御宮勸請ナリ、毎年六月十八日御舟渡神韓国原ニテ東夷静謐天下豊饒ノ御祈念アリ、御神輿原ヨリ□□エ渡海諸

国貢ヲ奉ル、古例渡海ノ神事ハ日本武尊ノ当峯ヨリ夷列エ渡舟ノ御例也、元正天王ノ御宇養老元年行基僧正巡国ノ時、登山海人等山中ノ海人ト申ヲ聞シテ拜礼アレハ海神ニ非ス千手ノ□像也、左脇ノ一行書シ□ □ニ権現ノ御本地定メラルヨシ、又神前ノ霊木ヲ伐立像ノ薬師ヲ彫刻シ本坊ニ安置シ、高麗ノ二字ヲ用テ寺号ヲ改高麗寺ト名ケ□（以下略）

ここに見るように、高麗権現と神功皇后三韓征伐時に武内宿祢の奏聞により高麗の神を日本（大磯）に勧請したとする話が反映されていることがわかる。また行基と関連づけて「高麗」を用いて高麗寺としたとしている。また1870年（明治3）の史料にも「高麗」の由来が明記されている^(注4)。

この1591年（天正19）に定海が書いた「高麗寺一山建立記」にある説明について考えるとき、現在神奈川県にある箱根神社の「箱根山縁起並序」の中に高麗権現に関連する話が出てくる。それは、1841年（天保12）に成立した『新編相模国風土記稿』にも採録されているが、「箱根山縁起並序」（1191年[建久2]に箱根権現19世別当の行実が編纂した）に神功皇后三韓征伐後に武内宿祢の奏聞により三韓の神を日本に勧請したとする話が存在している。それは次のようである^(注5)。

神功皇后討三韓後。有武内大臣奏云。奉請異朝大神而令祈願天下長安寧矣。即奉遷百濟明神于日州奉遷新羅明神于江州。奉移高麗大神和光于當州大磯聳峰。因名高麗山^云。

この「奉移高麗大神和光于當州大磯聳峰。因名高麗山^云。」にあるように、最初に「當州大磯」「高麗山」、つまり相模国大磯高麗山に高麗大神（大明神か）が祀られたとする。しかし14世紀前半の作とされる「箱根権現縁起絵巻」では高麗明神は、さらに大磯から箱根に移ったとされる^(注6)。

結局、当初大磯に祀られた高麗神（高麗明神/高麗権現）は、後に箱根へ移動して箱根権現になってゆくことになるという。現在のところ両者の直接的な関係性は明らかにできないものの、神功皇后三韓征伐後の武内宿祢の奏聞を受けて三韓の神を日本に勧請したとする点で、1191年の「箱根山縁起並序」と1591年の「高麗寺一山建立記」とには内容的に類似していることがわかる。

しかしすでに見たように1895年（明治28）12月の高麗神社「古社調査事項取調書」では、高麗の神を勧請したという話は消えてゆく。なぜ、祭神の由来の説明から、高麗の神、高麗明神/高麗権現を消してゆくのか理由がわからない。この点について類推する際の資料がある。それは、1895年12月高麗神社「古社調査事項取調書」提出に先立つ同年11月に神奈川県庁に提出された高麗神社「神社号復旧願」の中に見出すことができる^(注7)。

右神社名称ノ義ハ往古高来神社ト唱来リ候処、中古兩部神道本地垂迹ノ説盛ニ行ハレ、当社モ其ガ為メニ別当高麗寺ノ手ニ歸シ候、以来其古称ヲ失シ、高来ト高麗ハ之ヲ音讀ニ致候ヘハ同音ニテ共ニカウライニ候ユエ高麗権現ト称来リ、維新ノ際神仏分離致候後ハ、権現号ヲ廢シ、高麗神社ト唱居リ候、然ルニ世人働モスレバ昔三韓ト申シ候一部ナル、高麗国ノ蕃神ヲ祭祀致スモノト忘信シ（以下略）

神社の見解として、「高麗国ノ蕃神ヲ祭祀」するのでないとしているのである。

4. 高来神社の船祭（御船祭）

次に、高来神社の船祭（御船祭）と高麗について考えてみたい。「事由」の第6種（事項6、なお実際は5つ目の事項であるので本来は事項5であるが、本文書作成時の間違いである。）の祭礼の説明は、次のようである。なお引用文の読点は引用者が付したものである。

（前略）本社ハ旧大磯宿及高麗村ノ惣鎮守ニシテ、毎年四月十八日慶應元年七月十八日慶應元年ノ兩度ニ祭事ヲ執行ス、其四月ニ於ケル祭事ニハ、國家安穩五穀豊饒ノ祈禱ヲ行ヒ、兼テ境内ニ於テ農具賣買ヲ開市シ貞享元年、七月ノ祭典ハ、大磯ノ海濱字照ヶ崎ト称スル所ニ於テ行ヒ、三韓貢船ノ儀ニ擬シ、高麗丸明神丸ト名ツクル飾船二艘ヲ出シ、舟子共異様ノ着裝ヲ為シ歌上ケス、是當社古来ノ例式ナリ

ここでは、「七月ノ祭典」つまり船祭（御船祭）を「三韓貢船ノ儀ニ擬シ」としており、神功皇后伝説が三韓征伐した後に三韓からの貢船が来航したという伝説と結びつけた解釈となっていることがわかる。

確かに神社の祭礼の由来というものは所説があるといえるが、現在では、この高来神社と船祭（御船祭）については、『大磯町史』では次のように説明されている（注8）。

高来神社は、高麗地区・大磯地区の氏神で、コウライ神社（高来神社）、コマ（高麗）神社、ゴンゲンサマ（権現様）などと呼ばれている。神仏混淆の時代には上野の寛永寺の末寺であった高麗寺があり、東照権現を祀っていたが、神仏分離により高麗寺（高来寺）は廃寺となった。春の大祭は、四月十七日から二十日までで「山神輿」が登場した。また、夏の大祭は、七月十八日で「船祭」である（以下略）

さらに続けて、この船祭の詳しい内容については次のように説明されている（注9）。

『神奈川県民俗芸能誌 増補改訂版』によれば、江戸時代、高麗権現の本地仏千手観音像が大磯照ヶ崎の漁夫蛸之丞（加藤家）によって海中から拾得されたので、高麗寺村と大磯漁民が共催で、この祭礼を執行してきたという。このころの祭式は、南下町より権現丸、北下町より観音丸を仕立て、往昔あまのとりふねの天鷄船を模し、舟の帆でつくった幟、旗を幟し、船子漁師が大勢乗り込んで囃子を奏し船歌を歌いつつ、大磯浦から花水川をさかのぼって高麗山麓に着き、神輿を迎えて再び船で照ヶ崎の海で浜降りの禊ぎをした。

なお、現在の船祭では権現丸と明神丸はともに舟山車となって陸上を移動している^(注10)。

このように船祭（御船祭）については、上記の『大磯町史』でのような説明もあるように、千手観音像を海中から拾得したという言い伝えを反映したものとしている。神功皇后の三韓征伐と結びつけているとは言えないことがわかる。

一方、すでに見たように埼玉県の高麗神社では古代高麗（高句麗）からの渡来と結びつけて解釈している^(注11)。

以上のように、この船祭（御船祭）については諸説あるのであるが、ここでは、1897年段階での高麗神社の見解として、「三韓貢船ノ儀ニ擬シ」として、神功皇后伝説が三韓征伐した後に三韓からの貢船が来航したという伝説と結びつけた解釈となっていることが確認できる^(注12)。

おわりに

1897年段階の高麗神社「古社調査事項取調書」に関して、特に神社由来^(注13)と神社祭礼の船祭（御船祭）について検討した。今後さらに検討を続けてゆきたい。

注

- (1) 拙稿「高麗神社と高来神社」、茨城大学人文社会科学部紀要『人文コミュニケーション学論集』第2号、2018年3月。
- (2) 請求記号：2200430091、資料群名：相模国・武蔵国各郡文書（新収）・資料名：古社調査事項取調書、資料件名・資料概要：（陶陵郡大磯町高麗神社）（札含二件）、作成年月日：明治28年[1895]12月、差出人作成者：社司高麗邦恒外4名氏子総代町長等。
- (3) 『大磯町史1 資料編 古代・中世・近世（1）』神奈川県中郡大磯町、1998年、304-306頁。
- (4) 1868年（明治元）11月の明治政府への朱印状提出時に、この1591年「高麗寺一山建立記」を高麗権現と別当高麗寺の縁起として添付したという（『大磯町史1 資料編 古代・中世・近世（1）』神奈川県中郡大磯町、1998年、748-750頁。なお750頁の「解説」に詳しい経緯が書かれている。）。さらに、1870年（明治3）11月の「高麗明神領明細書上」の由来と祭神部分には次のようにある（同『大磯町史1』751頁）。

一 祭神邇邇々伎命 神武天皇御宇奉勸請候

附り

高麗明神元正天皇御宇養老元年高麗ノ二字ヲ賜ル

但

寺院相統之_節者高麗大権現ト唱申候

一 相 殿 応神天皇

神功皇后

一 神 位 明神ニ御座候

- (5) 箱根神社々務所編『箱根神社大系』上巻、名著出版1970年復刻版、11-12頁。
 (6) 箱根神社々務所編『箱根神社大系』上巻、名著出版1970年復刻版、37頁。
 (7) 『大磯町史3 資料編 近現代(1)』神奈川県中郡大磯町編集発行、1998年、415-416頁。
 (8) 『大磯町史8 別編民俗』、神奈川県中郡大磯町編集発行、2003年、551頁。
 (9) 同書、614 - 616頁。
 (10) 同書、615頁。
 (11) 拙稿「高麗神社と高来神社」、35 - 36頁。
 (12) なお注3で引用した、1591年(天正19)に定海が書いた「高麗寺一山建立記」では、日本武尊の東征説話と関連づけて説明されている。
 (13) ここで検討した「高麗寺一山建立記」(1591年[天正19])、高麗神社「古社調査事項取調書」(1895年[明治28])ともに、創建を神武天皇と結びつけているが、そのことも含めて、現在のところ神仏習合以前の創建時の社名が確定しがたいので暫定的であるが、高来神社の社名変更概念図は次のようになる。

